（３）人間形成と思想教育部会

教育部会名	人間形成と思想
部会長名／作成者名	部会長名：加藤憲治　／ 作成者氏名：加藤憲治

概　　要（2 ページ）

（１）組織・運営について

令和２(2020)年度の本教育部会は、大学教育推進機構 3 名、人文学研究科 9 名、国際文化学研究科 2 名、人間発達環境学研究科 22 名、保健学研究科 4 名の計 40 名から構成され、教育部会長 1 名（人文学研究科)、幹事 2 名（国際文化学研究科、人間発達環境学研究科）が世話役になり、運営された。

（２）実施状況について

・開講科目、カリキュラムなど

基礎教養科目として「哲学」(4)、「倫理学」(4)、「論理学」(8)、「心理学 A 」(10)、「心理学 B 」(8)、「教育学 A」(6)、「教育学 B 」(3) の 1 単位科目 7 科目を計 43 コマ、総合教養科目として「科学技術と倫理」(4)、「教育と人間形成」(3) の 1 単位科目 2 科目を計 7 コマ、専門教養基礎科目として「心と行動」という 2 単位科目 1 科目を計 1 コマ分、全体で 10 科目（うち 1 単位科目 9 科目・ 2 単位科目 1 科目）　５１ コマが開講された。

「哲学」、「倫理学」、「論理学」、「科学技術と倫理」は人文学研究科の教員と国際文化学研究科の教員、及び ６人の非常勤講師により開講された。「心理学 A 」、「心理学 B 」、「心と行動」は大学教育推進機構、人文学研究科、国際文化学研究科、人間発達環境科学研究科、保健学研究科の教員により、「教育学 A 」、「教育学 B 」、「 教育と人間形成」は大学教育推進機構と人間発達環境科学研究科の教員により行なわれた。

・今年度の工夫・改善点

PC 必携化が導入され、徐々に PC を授業に活用するという意識が受講生の間にも浸透しつつあったが、今年度はとりわけコロナ禍によりオンラインの授業を行なわざるを得ないという事情があった。そのため、これまで BEEF の授業への活用どころか、その存在を認知していなかった教員も、BEEF を利用せざるを得なくなった。BEEF の授業への活用に際しては、その活用方法及びその効果は各教員の能力にも左右される側面があることは否めない。オンラインの授業では大きく分けてオンデマンド型とリアルタイム型がある。オンデマンド型ではただ課題を与えて学生から課題の提出、その評価といった授業から、動画ファイル、DVD、パワーポイント等の視聴覚教材を組み込んだ授業まで、その授業の内容にもよるが、授業を遂行する上で教員の創意工夫が重要になってくる。また、リアルタイム型授業でも画面の共有、チャットや質問を受ける工夫、さらにその質問に対する回答等が求められる。これらオンライン授業自体の評価については今後検討されなければならないし、各教員のこうした活用能力の違いによって授業レベルにばらつきが出ないかについても注意する必要がある。

・現状と評価

「人間形成」に関わる問題を多角的に取り上げ、人間形成のありようと思想の意義について、基礎教養科目として①哲学・思想領域（哲学・倫理学・論理学)、②心理学領域（心理学 A ・心理学 B)、③教育学領域（教育学 A ・教育学 B ）から学習できるように教育課程が編成されており、基礎教養科目人文学領域の学習目標に沿った講義を提供している。また 、総合教養科目として「科学技術と倫理」、「教育と人間形成」という現代的な問題を扱う科目を提供し、現代的なニーズにも応えるよ

う配慮した科目配置となっている。つまり、人間形成と思想教育部会は期待される教育内容をカバーする科目を提供している。また、多くの科目が 100 人以上の講義となっており、抽選となる科目も少なくない事などから、幅広い学部の学生にとり重要な教養科目として認識されているものと考えられる。

（３）課題について

例年人間形成と思想教育部会の課題として挙げられる、大教室で授業を行なう上での問題は、昨年度はほとんどがオンラインでの授業であったため、今年度はオンライン授業での問題にとって代わったと言ってよい。もちろん、対面型授業が今後再開されたならば、従来の課題はあらためて対処されなければならない問題として再浮上することが想像される。しかし、希望的に考えるならば、オンライン授業でのパソコンの活用を経ることで、大教室での対面型授業に従来とは異なる対処方法が見出すことも不可能ではない。とりあえずは、このコロナ禍でのオンライン授業の問題に対応することが求めらる。

オンライン授業の課題としてまず挙げられるのは、オンライン授業という形態自体の評価である。オンライン授業に対する学生などの感想では、大教室での対面授業より授業に参画しているように思われるなどの感想が述べられることが多い。学生がこのような印象を持ち、教育上実効性があるのならば、今後大教室での対面授業よりオンライン授業を大いに推進すべきということになろう。そういう意味でオンライン授業という形態自体の評価がきちんとなされなければならない。これと関連して、今年度はコロナ禍でやむを得ずオンライン授業が行われたわけだが、この中で学生が十分な形でオンライン授業に参加できたのかも調査されなければならないように思われる（具体的にはスマートフォンで参加するしかなかったとか、ネット環境が劣悪でなかったか、など)。この調査は十分な形でオンライン授業に参加できなかった学生に対するケアのためにも必要だろう。

オンライン授業の次の課題として、学生と教員の負担の問題である。学生の負担については、オンライン授業のオンデマンド型ということで従来以上のレポートや課題等を学生に課すようなことはなかったか、ということである。さらに、教員の側の授業に対する負担も考慮しなければならない。従来とは異なり BEEF にアップする準備、レポートや課題等への対応、こうした負担が非常に大きいというのは教員の間で耳にする意見であった。こうした負担にどのように対処するのかは今後の課題であろう。

さらに、オンライン授業を行なう上で、この授業特有のスキルが求められるということであり、このスキル能力の違いによって授業レベルにばらつきが出ていないかという問題である。授業レベルを維持するために、教員にこうしたスキルアップを求めれば済む問題なのか、教員の負担も考慮し、教員を補助するシステムを考えるべきなのか、今後検討されなければならない課題だと思う。

（４）総合所見

全体として人間形成と思想部会の講義は必要とされる科目をバランスよく提供しているということができる。また、各教員の自己評価点検一覧からも、学生の授業に対する評価は高く、提供される科目の質的側面においても高い水準であるといえる。今後の課題としては、これらの高い水準が、教員個人の多大な負担により実現されていることを鑑みると、教員のサポート体制をいかに整えるか、オンライン授業での単位の実質化をいかにして実現するか、試験を実施できない場合、試験以外でいかに適切な評価を行なうか、等が挙げられる。

Ａ　組織構成と運営体制について

①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか（100 字程度）

開講する科目にふさわしい多様な専門性を持つ教員が担当し、実施体制・運営体制は概ね機能している。基本的な組織構成は 大学教育推進機構 3 名、人文学研究科 9名、国際文化学研究科 2 名、人間発達環境学研究科 22 名、保健学研究科 4 名の計 40 名であり、幹事 2 名、代表 1 名を置く体制が整備されている。
根拠資料 教育部会構成員名簿

Ｂ　内部質保証について

①学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか（100 字程度）

各授業で学生とのコミュニケーションペーパー・リアクションペーパー等の利用、質疑 応答の時間の設定、BEEF のメッセージ機能やメールを使った学生との質疑応答等の工夫がなされている。
根拠資料 授業振り返りアンケート結果

②自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか（150 字程度）

確認されている。 人間形成と思想教育部会では、100 名以上のクラスが多くあり、大規模クラスにおけるインタラクティブな授業実施をいかに限られた資源で行うかが課題である。今年度はオンライン授業をせざるを得ないという事情があったとはいえ、各担当者においては，視聴覚教材の使用，リアクションペーパーやミニレポートとそれに対するフィーバックなど学生の参加を促すための努力がなされてきている。
根拠資料 前年度までの自己点検・評価報告書、シラバス（今年度の工夫）

③授業の内容及び方法の改善を図るためのＦＤを組織的に実施しているか（100 字程度）

組織的な授業ピアレビューに参加し、気づきを得るとともにレポートの提出によりフィードバックも行っている。
根拠資料 ピアレビュー（授業参観）実施に関するガイドライン、ピアレビュー実施科目一覧（国際教養教育委員会資料）

④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるとともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか（100 字程度）

TA・SA の採用を行って適切に活用している。TA・SA に採用された学生は授業補助業務に関して適切に助言・指導を受けて業務にあたっている。
根拠資料

神戸大学 SA／TA 実施要領・ガイドライン、SA・TA 採用者名簿、TA ハンドブック

C　教育課程と学習成果について

①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっているか（100 字程度）

「人間形成」に関わる問題を多角的に取り上げ、人間形成のありようと思想の意義について、基礎教養科目として①哲学・思想領域（哲学・倫理学・論理学)、②心理学領域（心理学 A・心理学 B)、③教育学領域（教育学 A・教育学 B）から学習できるように教育課程が編成されており、基礎教養科目人文学領域の学習目標に沿った講義を提供している。
根拠資料 シラバス

②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか（100 字程度）

各教員が共通シラバス等に掲げられた授業の目標等に沿った授業を展開している。多くの教員が小テスト、リアクションペーパー等、及びそれに対する翌週のコメント、簡単なグループワーク課題、映像資料を用いたデモンストレーションの実施などの工夫をし、到達目標に沿ったものにする配慮を行っている。
根拠資料 シラバス

③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか（100 字程度）

共通目標を踏まえたシラバスを各教員が適切に実施している。さらに、教育の目的に照らして、レポート課題の導入、小テストの実施、独自の授業アンケートの実施等を踏まえて到達目標を達成するにふさわしい内容となっている。
根拠資料 シラバス

④単位の実質化への配慮がなされているか（100 字程度）

単位の実質化への配慮として、多くの教員がレポート課題の導入、小テストの実施、独自の授業アンケートの実施、予習・復習課題の導入、試験対策演習の実施を通じて学生の理解を確実なものにするように講義を行っている。このような工夫により、それぞれの講義で各学生が講義の達成目標に到達しているかどうかがはかられ、単位の実質化がなされている。
根拠資料 シラバス、小テスト、レポート課題

⑤教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか（150 字程度）

教育の目的に照らして、講義・演習・実験・実習等の授業形態の組合せ・バランスを適切に保つような工夫をした教育内容、学習指導法が採用されている。人間形成と思想部会が提供する科目は基本的に講義科目であり、100 人を超える大教室科目が多い。そのため、演習や実験・実習等を取り入れることは難しい。それを補うべく、多くの教員が小テスト、リアクションペーパー等、及びそれに対する翌週のコメント、簡単なグループワーク課題、映像資料を用いたデモンストレーションの実施などの工夫をしている。

根拠資料 　シラバス

⑥シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前･事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（50 字程度）

人間形成と思想教育部会が提供するのは主に基礎教養科目であるが、これらについては同一名称科目のシラバスの授業テーマ・目標を共通なものにしており、授業内容を反映した適切なシラバスが作成、活用されている。総合教養科目・共通専門基礎科目でも、講義内容を反映したシラバスが作成され、活用されている。
根拠資料 　シラバス

⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか（100 字程度）

教育課程の編成又は授業科目の内容において，学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮されたカリキュラムになっている。例えば、各授業で学生とのコミュニケーションペーパー・リアクションペーパー等の利用、質疑応答の時間の設定、メールを使った学生との質疑応答等の工夫がなされている。また、授業中の配布資料も学生のニーズを満たすものである。
根拠資料 　シラバス

⑧学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか（100 字程度）

いずれの講義においてもオフィスアワーがシラバスに明記されており、講義についていくことに困難を感じた学生はいつでも担当教員に連絡をとり、配慮を受けることができる状態にある。また、授業後の感想やコメントなどを通じて、配慮の必要性の把握に努めている。
根拠資料 　シラバス

⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか（100 字程度）

人間形成と思想教育部会においては、科目ごとに内容に即した成績評価基準が策定され、それがシラバスを通じて学生に周知されている。授業中に実施する小テストや課題、期末試験など結果により、周知された基準に即して適切に成績評価、単位認定が適切に実施されている。
根拠資料 　シラバス、試験答案、成績分布（国際教養教育委員会資料）

⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか（100 字程度）

学生による授業評価の結果として総合評価を見ると、多くの科目で 5 点満点中平均 4 点以上の総合評価が得られており、各科目における学習成果が上がっていると考えられる。また、学生からのコメントを見ても、おおむね講義に対する理解度を含めた好意的な感想がよせられている。
根拠資料

試験答案、レポート、授業振り返りアンケート結果